書簡にみる本多斎と草鹿砥宣隆

桒　原　将　人

1．はじめに

草鹿砥宣隆について　「遠州国学最後の偉人」[1]と評される草鹿砥宣隆（1818-1869）は、実は三河の国人だし、平田派の国学者だ。宣隆は三河国一宮砥鹿神社の神主の家系に生まれ、自らも神主を務め、若くして従五位下近江守に叙任された。17歳の時に江戸の平田篤胤に入門し、年頭御礼で出府の際には決まって平田塾（気吹舎）を訪れた[2]。その一方で、遠州の八木美穂の元へも通い、泊まり込みで指導を受けた。それが冒頭の一文のような評価につながる。

本稿の目的　草鹿砥宣隆についてはこれまでいくつかの研究がなされているし、同家所蔵文書の調査も実施されている[3]。

しかし、同家には未だ本格的な調査の手が及んでいない史料も存在する。

現在、筆者は、砥鹿神社が進める草鹿砥宣隆顕彰事業に参与しており[4]、その際、同家に、本多斎から宣隆に宛てた書簡があることに気づいた。本多斎（1830-1910）は岡崎藩主本多忠民の弟である。大名の公族ながら平田塾の門人帳に名を連ねるという異色の存在だ。本多斎と草鹿砥宣隆の関係については、これまであまり言及されていない。

そこで、本稿では、草鹿砥家が所蔵する本多斎書簡３通の翻刻を行ない、広く学界の共有財産として資するものとしたい。

凡例　史料の翻刻にあたっては、常用漢字を用い、読点を施すことを原則とする。本文の改行は原文に従うが、後付け（日付･署名･宛名）については敢えて改行し見やすい形に改めている。

他方、引用史料における改行や平出は原本のそれを反映していない。割書きは〈　〉で括って表示し、補入（文脈上本文に挿入すべき加筆傍書）は指定箇所に組み入れるなど、適宜可読性を高めるよう努めた。

2．史料の提示

（本多斎書簡①）

呈一翰残寒未并
春意之候、先以愈
御精鋭被成御座珍重
御義（儀）存候、旧臘
気吹の舎大人御入門
之節者御紹介幸甚之
至候、任好便御安否御尋迄
如是御座候
恐々謹言
正月廿一日
本多斎
草鹿砥近江守君
机下
尚々時季折角御自重
専一存候、以上

（本多斎書簡②）

一翰令啓達候、時季不順
之砌、先以愈御盛福被為在
勤王御同意奉欣躍候、過日
御発途之節ハ精菓御恵贈
被成下万々難有仕合、且拝面
其節甚以疎略之御歓待編（偏）ニ
御仁免可被下候、乍然種々清々敷
御尊話拝聴仕候事、於拙子ハ
大幸不過之候、扨御登京之後
迅速御尋問可申上候処、好便
無之付是彼大延引之段是
亦御恕饒可被成下候、尚以御留
守中一度貴家へ御尋申上候心
得ニハ御座候得共、却而御迷惑之
義（儀）と存、態与相控申候、先者
御安否御尋迄如是御座候

恐惶謹言

七月二日

本多斎

草鹿砥近江守君

机下

尚々時季折角御自玉専一
奉存候、当地御留守中御用
義（儀）候ハヽ無御遠慮被仰聞候様ニ
奉希上候、早々以上

（本多斎書簡③）

未得拝面候得共、呈一
翰候、時是向寒之砌、先以
愈御勇猛被成御在京
奉歓喜候、然者先達而ハ
尊大人御義（儀）頓ニ被趣（赴）
幽界ニ候由承候、不堪驚愕
拙子ニ於而茂無力義（儀）朝
暮奉遺憾候、尚尊霊
之幽界ゟ学事を御幸知被下度
事のミ奉祈請候事ニ御座候
因而此品甚以乍軽微
尊霊ニ奉供度存候間
何卒御序之節霊山なる
幽郷江御供被下候様奉頼上候
只今急ニ上京之者有之
走毫之段御賢察御披
見可被下候、先者右要用迄
如是御座候、早々

恐惶謹言

十月十二日

本多斎

草鹿砥孫君

机下

3．解題

本多斎について　ここではまず、書簡の差出人である本多斎に焦点をあて、その半生について触れておきたい。このことについては、羽田野敬雄の「萬歳書留控」の明治元年（1868）辰九月条が参考になる[5]。

当岡崎城主本多美濃守忠考（忠民の誤り）君之奥方ノ弟君〈奥方ハ御実子、忠考（忠民の誤り）君ハ高松家ゟ御養子也〉本多斎（イツキ）忠恕主ハ正統之男子なれど御幼年ニ付、姉君へ御養子ニて御家督有之、依之右御人者越後高田本寺へ御養子ニ相成候処、出家を嫌、御離縁ニ相成、御部屋住ニて按察使と被申候所、いつきと御改名有之由也、右之御方皇学御執心、殊ニ平田翁御信仰ニ付（以下略）

本多斎は岡崎藩主本多忠考（ただなか）の子。忠恕のち忠胤（ただたね）と名乗った。「正統之男子なれど」幼年で病弱だったため、讃岐高松藩松平家から養子に迎えた姉婿の忠民（ただもと）――敬雄の萬歳書留控には「忠考」とあるが「忠民」の誤り――が本多家の跡を継いだ。そのため、越後高田の浄興寺へ養子に入るが、出家を嫌って岡崎に戻り、部屋住となり、按察使、さらに斎（いつき）と称した。国学、ことに平田国学に並々ならぬ関心があり、明治元年12月14日に平田門に入った。門人帳[6]によれば入門紹介者は竹尾正胤だった。

本多斎書簡①　本多斎から草鹿砥宣隆に宛てた礼状である。差出の日付は「正月廿一日」、内容から明治２年のものと考えられる。注目すべきなのは、「気吹の舎大人御入門之節者御紹介幸甚之至候」（平田塾入門の節はご紹介いただき幸甚の至りです）という一節だ。これは、斎にとって、宣隆が入門紹介者であったことを意味している。しかしながら、平田塾の門人帳では入門紹介者は竹尾正胤になっており[7]、宣隆ではない。この矛盾はいったいどこから生じたのだろうか。

この問いに対する答えを、筆者は、とある出来事の中に見出せると考える。それは書簡発信の前々月にあたる明治元年 11 月のことだ。この月の中旬、草鹿砥宣隆・羽田野敬雄・竹尾正胤に、行政官当局から呼び出しがきた。皇学所出仕のため上京せよという。途次、三人は岡崎に宿をとった。同地では、「本多斎忠恕君〈本多侯御隠居〉ヨリ御餞別金三百疋」を贈られ（岡崎藩前藩主の本多忠考（ただなか）から餞別金三百疋をことづかってきた本多斎に目見え）、斎からは「御歌」も賜ったと敬雄は証言している[8]。三人と斎とは顔を合わせて歓談したのだろう。

ここからは推測だが（史料を欠くが）、この時、斎は平田塾への入門の意思を表明したのではないだろうか。だとすれば、その意を承った三人は、京に着くやいなや、在京の平田銕胤に面会し、斎を門人として推挙したはずである。斎の入門は明治元年 12 月 14 日となっているから、平仄は合う。

もし、そうなのだとすれば、斎にとって宣隆・敬雄・正胤の三人はいずれも入門紹介者とみなして然るべき人物ということになるだろう。「気吹の舎大人御入門之節者御紹介幸甚之至候」という一節は、その蓋然性が高いことを示すものとして捉えておきたい。

本多斎書簡②　宣隆は皇学所出仕中の明治２年４月に一時帰郷しており、翌月「御発途之節」（再上京の行き掛けに）矢作にて斎と面会している[9]。書簡②は、斎から宣隆に宛てたその折の礼状だ。差出の日付は「七月二日」、内容から明治２年のもので間違いないが、宣隆は６月 21 日に京で急逝しており、斎はそれを知らずに礼状を認めたことになる。

本多斎書簡③　宣隆の急逝を知った本多斎が、宣隆の子「草鹿砥孫」に書き送った悔み状である。孫（ゆずる）は宣隆の世嗣であり、実名を宣譲という。草鹿砥家では代々、孫十郎という幼名を称したが、孫（ゆずる）は丁年に達してもなぜか実名をあまり用いず、この幼名を簡略化して単に孫（ゆずる）と称した[10]。父宣隆は京で客死したので、三河一宮にいた孫（ゆずる）は、臨終に立ち会っていない。孫（ゆずる）はすぐに上京し、霊祭にあたった。そして、しばらく滞京する間に、皇学所への入学を果たしている[11]。斎が「愈御勇猛被成御在京奉歓喜候」（京においてますます御精励のことと心からお喜び申し上げます）と述べているのはそのためだ。差出の日付は「十月十二日」、内容から明治２年のものと考えられる。

４．結びにかえて

成果　平田門人の姓名や入門年月日は門人帳[12]によって把握できるが、紹介時の実相についてはその他の史料を求めなくてはならない。本稿では、その具体相が窺える極めて稀な好史料を提示できたものと思う。そして、３通の書簡から、本多斎が、草鹿砥宣隆をめぐる地方知識人の輪の中にいたことを明らかにすることができた。

課題　もっとも、前述の具体相については、１通の書簡をもとに推論の上に推論を重ねた仮説に過ぎず、今後、新たな史料の蓄積を通して検証されるべきものであることは多言を要しない。さらなる史料発掘に努め、探求を続けてゆくことが今後の課題である。

謝辞　いまや古い話で我ながら驚いてしまうが、筆者が草鹿砥宣隆大人と深く関わるようになったのは平成 14 年（2002）に一宮町歴

史民俗資料館で開催した企画展「国学者 草鹿砥宣隆」からで、その準備段階から数えれば、もう20年が経つ。この間、草鹿砥宣和氏（宣隆大人の玄孫（やしゃご）、４代後のご当主）と三宅勝晴氏（砥鹿神社権禰宜）には一方ならずお世話になってきた。また、橘敏夫氏（愛知大学綜合郷土研究所研究員）には日頃から有益な御教示をいただいている。ここに記して感謝の意を表する次第である。

註

(1)　尾崎知光（2002）

(2)　このことについては、史料翻刻のかたち（註４で後述する『三河国一之宮砥鹿神社神主草鹿砥宣隆著作集（仮）』）で披露できるよう鋭意作業中である。ここでは事実を簡単に紹介するだけに止め、詳細は別稿に譲ることとしたい。

(3)　草鹿砥家文書の調査は、少なくとも過去３回は実施されている。

①昭和６年（1931）５月ごろ。これは同家でコンクリート造りの蔵が建った時期にほぼ相当する。

②昭和15年（1940）６月ごろ。これは昭和19年（1944）刊行の『三河國一宮砥鹿神社誌』編纂に伴う史料調査の時分である。

③平成16年（2004）12月～同18年１月。これは筆者らが、重要と思われる史料を精選して目録（桒原・塚本2006）を作成した時である。

(4)　平成30年（2018）は草鹿砥宣隆生誕200年、令和元年（2019）は没後150年の節目の年にあたる。この時宜を得て、現在、砥鹿神社では「草鹿砥宣隆大人命顕彰事業」を進めている。また、これは天皇陛下の御代替奉祝記念事業の一つに位置づく事業でもある。

筆者は、同社から『三河国一之宮砥鹿神社神主草鹿砥宣隆著作集（仮）』編集委員の委嘱を受け、平成29年度（2017年度）よりこれに従事している。

(5)　田﨑哲郎（1984）pp.1188-1189

(6)　平田篤胤全集刊行会編（1981）p.158、p.407

(7)　註６に同じ。

(8)　羽田野敬雄「萬歳書留控」明治元年辰十一廿八日条。羽田野敬雄研究会編（1994）p.448

(9)　このことについても、註２に同じ。

(10)　国幣小社砥鹿神社社務所編（1944）p.279では、宣譲の幼名を「孫」としているが、これは誤りである。安政５年（1858）に宣譲（孫（ゆずる））が襲職した時の記録（草鹿砥家所蔵「御宮并家内諸事覚」）を見ると、宣譲（孫（ゆずる））の幼名もまた代々称した「孫十郎」であったことが分かる。

(11)　このことについても、註２・註９に同じ。

(12)　平田篤胤全集刊行会編（1981）

参考文献

・国幣小社砥鹿神社社務所編（1944）『三河國一宮砥鹿神社誌』砥鹿神社社務所

・近藤恒次（1954）『三河文献綜覧』豊橋文化協会

・平田篤胤全集刊行会編（1981）『新修平田篤胤全集 別巻』名著出版

・田﨑哲郎（1984）「第五章 国学」新編岡崎市史編集委員会編『新編岡崎市史 近世学芸 13』新編岡崎市史編さん委員会

・國學院大學日本文化研究所編（1990）『和学者総覧』汲古書院

・新編岡崎市史編集委員会編（1993）『新編岡崎市史 総集編 20』新編岡崎市史編さん委員会

・羽田野敬雄研究会編（1994）『幕末三河国神主記録』清文堂出版

・桒原将人（2002）『国学者 草鹿砥宣隆』宝飯郡一宮町教育委員会

・尾崎知光（2002）「埋もれた国学者 草鹿砥宣隆」『中日新聞』12月３日付け夕刊文化面

・桒原将人（2005）『遠州国学最後の偉人 国学者草鹿砥宣隆』宝飯郡一宮町教育委員会

・桒原将人・塚本弥寿人（2006）「三河国一宮砥鹿神社神主草鹿砥家史料目録」『愛大史学 第15号』愛知大学文学部史学科

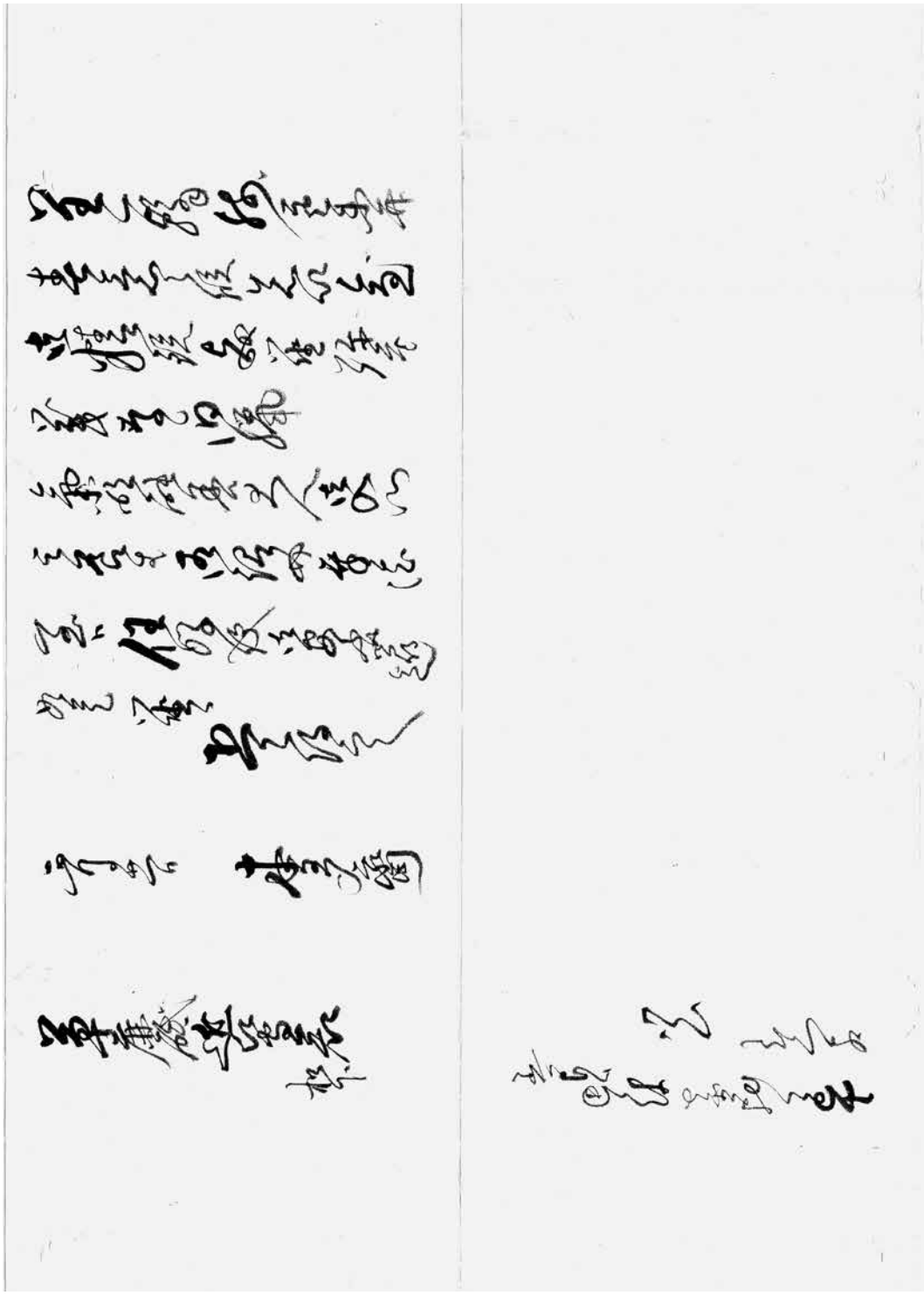

写真１　本多斎書簡①（L46.0cm×W32.4cm）

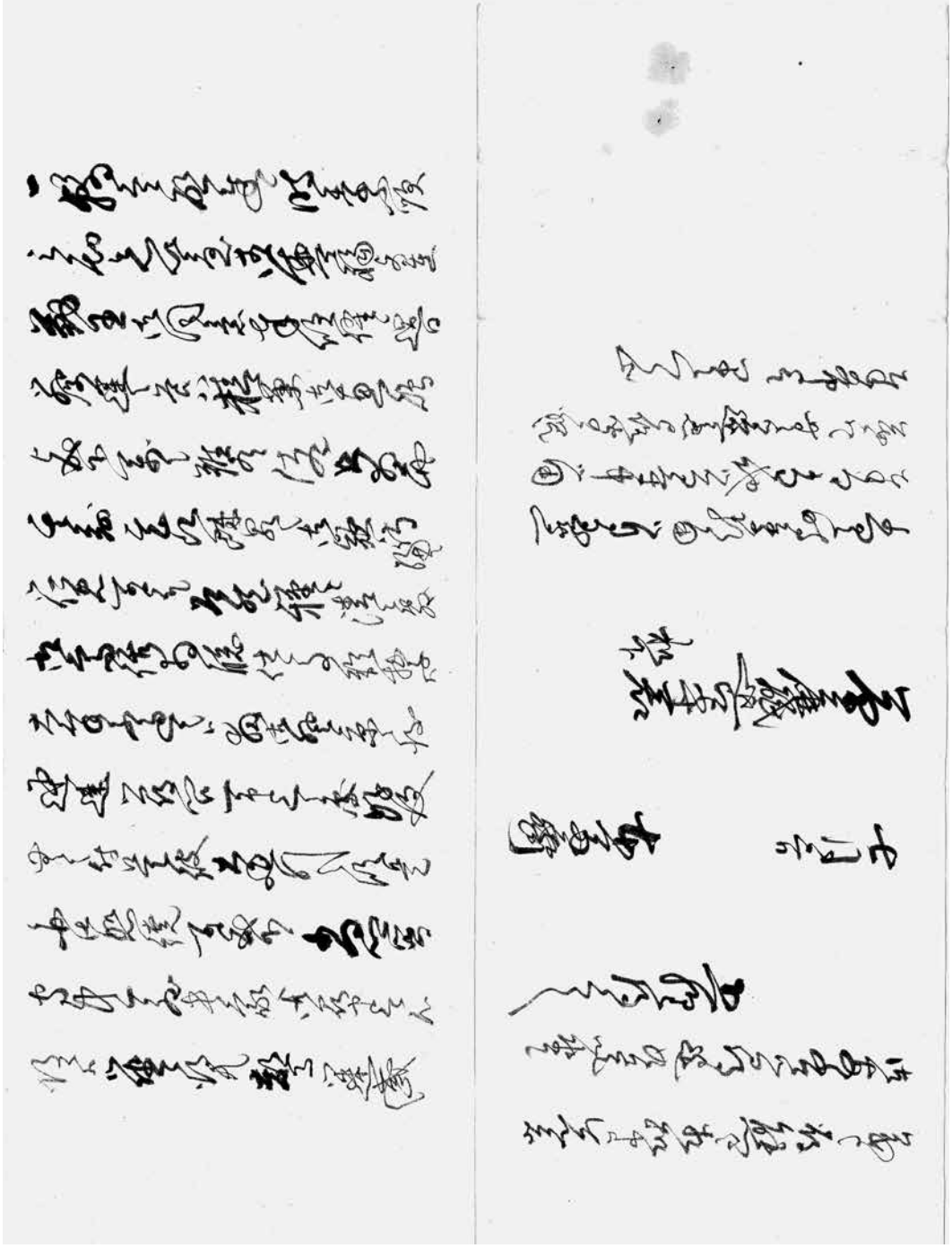

写真２　本多斎書簡②（L41.9cm×W31.4cm）

写真３　本多斎書簡③（L41.8cm×W31.5cm）